

mnfikmyhk
Fukapon

五月に来たる 彼女

——トントントントン……

——カシャカシャン……

——シャー……

彼の目を覚ましたのは、久しぶりの生活音。

枕元から携帯を引き上げバカッと開くと、午前七時。まだ早いのに何を……と寝ぼけたままに考え出して、はたと気付く。

「誰？」

彼は慌てて上体を起こし、床へと足を滑らせた。

スツと床に片足を付けたとき、見つめた先で笑顔が振り返る。

「あ、起こしちゃった？ おはよ」

「お、おはようございます……」

反射的に挨拶を返してしまつた彼だが、相手が誰か、わかつたわけではない。

「あのー、あなたは……」

恐る恐るベッド離れ、僅か先の台所へと向かう彼。

一方、エプロン姿の彼女は小首を傾けて、ポカンと突つ立つてゐる。近づいてくる表情が解せないようだ。

「どうしたの？ そんな顔して」

同時にスルツと落ちるまつすぐな黒髪、クリーム色のパジャマと比較しても明るい白い肌。彼はこの端整な女性に見覚えがない。

「いや、その、あなたは、誰ですか……？」

この部屋は彼が一人暮らし部屋である。

昨晚、いや、一昨日の晩から今に至るまで玄関の鍵はかけっぱなしだ。仮に戸締まりがなされていなかったとて、他人の部屋に上がり込む人がどれだけだろうか。しかし見知らぬ彼女はここにゐる。

いるとすれば、どのような類の人間か。

「え？ 私？」

大きな瞳を見開いて、ケロッと可愛く言い放つ彼女だが。いるとすれば、犯罪者だ。

改めて現実を直視した彼は、丸腰であることに齒噛みした。すでに部屋の中程にあり、手が届く範囲に武器になりそうなものはない。尤も、どこにしようとかバットやゴルフクラブのような、彼女を叩きのめす道具はこの部屋にないのだが。

「あの、もしかして、聞いてない……？」

彼女は傾げた顔を戻すと、ボンと胸の前で両手を合わせる。一人合点を得たようだ。

「今日からしばらく、ここにお世話になる神岸^{かみぎさき}様です。って、知ってるよね？ 改めまして、よろしく」

ペコリとお辞儀をする彼女の胸元から、平たい肌色が覗いた。しかし彼は気付くこともできず問い返す。

「えと、あの……。しばらく、ここに……？」

お世話になるってどういうことだ。そんな話をした覚えもなければ、聞いた覚えもない。

すっかり納得した様子の彼女とは対照的に、彼はまだまだ警戒中。

「うーん、忘れちゃった？」

彼がもしも不埒な男ならば「あー、思い出した思い出した。キミねキミ」とでも言うであろうキュートな笑顔が、迷いなく、気さくに近寄ってくる。しかし彼は残念ながら朴訥な男なのだ。

「あ、はい、済みません。全然……」

一步、二歩、ゼロ距離まで一步半というところまで来ても、彼

の認識する彼女は不審者ではない。

もし彼女が今、ナイフでも取り出したのならば。確実に彼は刺される、一撃必殺。

残酷な現実には彼は目を閉じると、果たしてそのときはやってきてしまった。

——ッ

フロリングが一步踏みしめられた次の瞬間。

「んっ」

触覚が反応したのは唇。覚悟をしていた土手っ腹ではなく、唇だった。

見開いた彼の眼前には、長い睫毛。閉じられた瞼。

「んむあっ、あ、あのっ！」

驚きのあまり口を開くと、彼女はすでに半歩下がって微笑みかけていた。

「思い出した？ 私とのキス」

加えて事もなげに放った言葉は、意外にも彼を落ち着かせてしまふ。

「あ、もしかして、皐さん……？」

「そうよ、さっきから言ってるじゃない。よろしくね、カツ」

ニックネームで呼ばれた彼、山川克典は、今まで気付かなかったことに多少の不自然さを覚えながらも。

「あ、はい。よろしくお願いします」

同郷の先輩である皐に、丁寧に頭を下げた。

目玉焼きに味噌汁、炊きたてのご飯。

本来は一人用であろう小さなテーブルで二人。ちよっと賑やか

な朝食を食べたあと、大学生である彼らの行動は決まっていよう。

「そろそろ出ないと遅刻しちゃうね」

食器を手際よく洗った皐は、エプロンを外して、部屋のドアノブに手をかけた。

「着替えの見せ合いっこは恥ずかしいよね？ 私は外出てるから、終わったら声かけて」

テンポよく「ねっ！」と飛ばされたウインクに、克典はハッとした。

「あ、あのっ……」

おのき放った言葉は扉に阻まれた。彼女には届いていない。

覚悟できたわけではない。しかしこの場合は、着替えるしかないだろう。彼はやむを得ず、放り出されていた服に腕を通す。

ものの数分で着替えを終わると、約束通りにドアを開けた。

「着替え、終わったよ」

「あ、おっけー」

アパートの廊下から外を眺めていた皐は、くると振り向いて応じる。同時に加える言葉は、彼女の人となりを表していよう。

「わあ、ちよっと見ない間に大人っぽくなったねえ」

「い、いや、そんなことは……」

スルッと克典が喜ぶ言葉を選ぶにとどまらず、満足げに笑みを深める。さらにもう一言。

「少しくらいだったら覗いてもいいからね？」

彼女の癖なのだろうか、またもやウインクを決めると入れ替わりで部屋へと入った。

春から夏へと変わり始めた、生ぬるい風が抜ける廊下。彼は着替えにも興味を示さず、また首を傾げている。

神岸皐、皐さん。彼の出身地にしては珍しい、高校からの転入者だった。一つ上の先輩だ。クールな容姿には似合わぬ気さくさで、特に小さな子たちに人気があった。昨年上京したが、一浪の後、今年から大学生。身を寄せていた親類が先月なくなり、少しの間、彼の部屋に居候する。

彼女が今、彼の目の前にいることに不思議は全くない。しかし今朝の違和感が、未だに心から抜けないでいる。

「んー、何だろうなあ」

ひとしきり考えを巡らせ吐いた独り言だったが、予期せぬ応答が返ってきた。

「何が？」

「い、いや、何でも……」

克典が慌てて振り返ると、いつの間にドアからひよこつと皐が顔を出している。続いて披露された身体は、オフホワイトのジャケットに紺色のセミフレアスカート。少し折り目正しい感じは、まさに彼が記憶している通りだ。

「どう？ 似合うかな？」

「あ、うん。やっぱり皐さんだよ……」

「ありがと。じゃあ、行きましようか」

やはり何ら不思議のない彼女の言葉に、彼は目下の問題へと思考を切り替えた。

成り行きで着替えまで済ませてしまったが、ハッキリ言わないと。

「い、いや。僕は……」

しかし、その問題を抱えるものがハッキリ言えるわけではない。

「ほら、一限遅れちゃうよ？ 早く鞆取ってきて！」

結局、文字通り彼女に手を引かれ、大学へと向かった。

皐は日替わりランチ、チキンソテーを切り分けながら、溜息を抑え込んだ。代わりに吐き出したのは、黙々と食べる克典への問い。

「ねえ、午後はどうするの？」

「特に……。帰って寝る」

返ってくる回答はまたもや予期した通りだ。何度も経験している彼女にとっても、気が滅入りそうな回答だ。

「サークルとか、バイトとかは？」

「ない」

克典が数週間ぶりに来た学校は相変わらず、特に嫌う理由のない場所だった。しかし、特に好む理由もなく、積極的に来る理由も見当たらなかった。

「そっか」

彼の頭の中など覗くまでもなかった彼女は、「走るの好きだったのに、やめちゃったの？」という言葉を当然飲み込み。

「じゃあ、またあとでだね。私、午後の授業あるから」

「あ、ああ。行つてらっしゃい」

「ありがと。カツも気を付けて帰つてね」

食堂を出て二人は別れる。克典は家路につき、皐は逆方向へと足を向ける。

しかし彼女が向かったのは、午前中に授業を終えたはずの教室だった。

「さてと、捜しますか」

がらんとした教室の中で、彼女は大きな独り言を放つ。

同時に髪を一本結びにまとめて、心持ち大きな歩幅で歩き出した。

午前中、二限目のあった教室へ。ここは午後の授業が始まっており入ることはしなかった。

昼食を取った食堂へ。昼休みが終わり人がだいたい揃った中、一階、二階、三階……と全フロア巡回。

食堂の入り口に戻ってくると、ジャケットのポケットからメモを取り出す。

「んー、ほとんど八号館と十一号館？ また戻って、全フロア検査ね」

再びメモをしまうと、彼女は一限のあった八号館へと戻る。大教室ばかりが収まっており、搜索範囲は広い。しかし彼女の捜し物は見つからなかったらしい。

「予想通り、か。大学はこれだからねえ、簡単に一人になっちゃうんだもん」

廊下の欄干に寄りかかり外を眺めると、授業中も多くの学生が歩いている。女同士、男同士数人で歩いているのもいれば、カップルもいる。もちろん一人で行き来しているものもたくさん。

そんな中に、皐は見知った顔を見つけた。

「あ、貴子^{たかこ}。あらあら、いつの間に彼氏を見つけたのね」

小さく微笑むも、カップルが離れていくと同時に、キリッとした表情を取り戻す。彼女は再び、大学内を歩き出した。

皐が戻ったのは真夜中十二時も目前。アパートの部屋に辿り着くと、鞆から出した鍵でドアを開けた。

「ただいまー」

世間ではもう眠りにつく人も多かるう。彼女の入った部屋も暗く、克典はすでに寝ているに違いない。すでも何も、昼間っから寝ていてそのままなのだろう。

ヒールの低いパンプスを脱ぎ、買いたった物袋を玄関に置く。部屋に上がるとパチンと電気を付けて、トントんと奥へ。ベッドの上へ。
「おい、ただいまー」

仰向けに寝ている克典を覗き込むように、皐は上体を折つてもう一度挨拶した。

二人の間は三十センチ。目を覚ました彼はきつと、やっぱり驚かないだろう。

「……ああ、お帰り」

十時間近いであろう昼寝から目覚めた彼は、彼女の予想通り、興味もなさそうに返事した。

「ただいま」

パチッとウィンクするも引き続き無反応の彼。

彼女はそれでも笑顔を崩さず上体を起こす。ベッドから離れると、ジャケットを脱いだ。

「夕飯、食べた？」

「ううん、寝てたから……」

「そう、じゃあ、作ろうか？ インスタントラーメンだけどさ」

——こくん

頷く彼を前に、彼女はビシッとエプロンを着けた。ちよつとした予想外に、笑顔は作り物でなくなった。

程なくして机に並んだのは、どんぶり茶碗。

「さすがにどんぶりは二つもないよね、私も持ってこなかったし。作ったあとに気付いちやった」

失敗失敗とちよんと両手を胸元で合わせて、はにかみ色を混ぜた笑顔に変えている。

「なので私はお茶碗ね。さ、召し上がれ」

「あ、うん、いただきます」

「いただきます」

こうして始まった夕食は、昼食同様、言葉少なだった。僅かに交わされる会話は、いつも臆から始まる。

「今朝の授業、カツが起きててびっくりしちゃった」

「あ、うん……」

「朝眠そうだったのに、ちゃんと聞いてるんだもん。現役合格は伊達じゃないんだねー」

「別に、そんなんじゃ……。たまたまだよ」

「またまたご謙遜を。私はちよっと眠かったかな」

彼の前で大学の話題は避けるべきか。臆に迷いはなかった。黙りこくるよりは、話すべきだ。

反応が悪ければ、伝家の宝刀を抜けばいい。そのために異性である自分が克典の前に現れたことを、彼女はよくわかっている。尤も彼女の場合、反応がどうであろうと抜くのだが。

「ごちそうさまっと。お風呂入れるね。一緒に入るっか？」

「えっ？」

「お風呂。一緒に入らない？」

「ああ、いいよ、先に入って」

抜いたとて効果があるとは限らない。

今回はものの見事に躲かしてしまった。むしろ的外れだったようだ。

しかしは問題ない。これは臆にとって想定内。まだまだ手はあ

る。着替えてダメならお風呂。想像でダメなら実物だ。

「ごめん、鞆の上のシャンブー取ってくれない？」

脱いだ後に手招きしてみたり。

「あ、バスタオル忘れちゃった」

湯上がりの上気した肌を曝してみたり。

「ごめん、下着置きっぱなしだったね」

彼の入る脱衣所に生温かい下着を残してみたり。

臆は定石を踏むも、もれなく反応は薄かった。さすがにゼロではないようだが、十九歳の男子の反応としては不足も不足だ。

「お休み」

「ああ、お休みなさい」

背中を流してあげようかと提案、パジャマ越しにノーブラをアピール、一緒に寝ようかとベッドに入ってみる、いずれも失敗。

彼女の初日は、想定範囲内ながら、最底辺に位置している。真つ暗になった若い男女二人の部屋で、悶々としているのは彼女だけだ。

（久しぶりに難敵が来たわねえ。五月はあと五日、間に合うかしら）

譲られそうになったベッドを辞退して、持ち込んだ寝袋にくるまりながら。

（明日の授業は、午後に英語かあ。人数少ないから厳しいかなあ）
立ちこめる暗雲に気付きながらも為す術思いつかず、彼女も眠りに落ちた。

翌日、彼女の予想は的中した。

「次は英語だよ。サボっちゃダメなんだからっ！」

「きよ、今日はいって……」

往来の少ない食堂前、皐と克典は一悶着起こしていた。

「ねえ、具合でも悪いの？」

ふと笑みを消して覗き込む皐に、克典は目を逸らして繰り返す。
「何でもないって。ただ、今日は行く気が起きないだけで……」

「私、何度でも言うからね。『何でもない』じゃわからないだよ！」

昼休みが終わろうという時間だ、元々賑やかで二人の声はそうそう目立たないが。喧嘩と見間違えそうな雰囲気は異様で、通る学生たちの視線を集めていた。

「ほら、行くからねっ！」

皐は周囲も気にせずピシヤリと言うと、細い腕を伸ばして彼を引っ張る。

対して克典は嫌々でありながらも、強く反する気はないのか、彼女に引かれっぱなしだった。

ところが逆に見えた人もいたらしい。

「その手を離さない！」

突如現れた少女は鋭い声をぶつけると同時に。

——パシンッ

克典の左頬を平手打ち。

周囲は瞬く間に騒然とした。

叩かれた彼は口を半開き。呆然としている。

間近で見ている皐はなぜか、苦笑いを浮かべていた。

少女の格好、お人形さんのような洋服が状況の異様さに拍車をかけている。しかし本人は周囲のどよめきも気にせず、キツい視

線を克典に飛ばしている。

「その汚い手を離さないっ！」

彼女は二人の腕を引き剥がすと、片方の腕を投げ捨てる。同時に取った行動は、さらに注目を集めた。

「皐お姉様、ご無事ですか？」

甘ったるい調子で言葉を紡いだ唇を、握っていた手に押し当てた。

「ちよっと、何あれ……」

「あの男の子、可哀相だね……」

「え、そーゆー修羅場なの？」

「レズ？ ああ、百合って言うんだっけ、最近は？」

昼時の食堂前に似つかわしくない言葉は、さらなる人を呼び。すっかり黒山の人だかり。

注目の的となった少女は……。

皐の腕を胸に抱き、頬を赤らめている。

しかしこの場にいた全員が確信していた。彼女の恥じらいは、周囲の視線のせいではない。周りなど気にしていない、皐との接触が全てなのだ。

ついには携帯やらカメラやらのシャッター音が響き出すと、ようやく皐が口を開いた。

「貴子、あなたは勘違いしてるわ。私が、彼の手を握ったの」

「ええええええええええええええええええええええええ!!」

間髪入れず飛んだ感嘆に、周囲は当然、哑然とした。

大学は今、三限。

皐が克典を、あれほど授業に連れて行こうとした三限。

なぜか二人は食堂にいた。なぜかを解く鍵、百合少女とともに。

「貴子、謝りなさい」

「は、はい……」

克典が聞いたことのない、強い口調で皐が指示すると。少女も打って変わって萎れてしまった。

「ごめんなさい……」

「私からも、ごめんなさい。まさかこんなことになるなんて……」

向かいの二人が頭を下げる状況に、克典は反応しようがない。理解し切れぬまま小さく頷いていると、皐が気付いたようだ。

「ああ、ごめんなさい。まずはこの子が誰か、だよな。ほら貴子、自己紹介なさい」

「はいっ」

少女に向けられたことがすぐわかる強い言葉に、皐に向けられたことがすぐわかる甘ったるい返事がなされる。

そして自己紹介の口調もまた、誰にあてたものかわかりやすかった。

「風間貴子^{なままたかこ}、経済学部^{なままたかこ}の二年生よ。皐お姉様とは大の仲良しだったんですからっ！」

敵意剥き出しで自己紹介を終えると、当然待っているのはお叱りの言葉。しかし少女は、それを待っていたかのようにもあつた。

「貴子、ちゃんと反省なさいっ」

「はい」

叱られるとは思えない蕩けた表情に、もう一つ返ったのは克典の言葉だ。

「仲良しだった？」

彼に他意はない。単に聞き返したただけだ。しかしそれは禁句なのだ。

「う、うるさいわねっ」

ダンッとテーブルを叩いて立ち上がると、少女は捲し立てるように続ける。

「私と皐お姉様は閨をともにした仲ですよ！ 今ちょっと目をかけてもらってるからって調子に乗らないでくださいさる？」

貴子の容姿はもちろん、声も大学内では目立っている。背丈は中学生、下手すれば小学生のように小さく、声は高いのだ。

興奮も相まって甲高い声が、人の滅った食堂にこだまする。またもや注目を集めることとなり、皐はもはや、項垂れ額に手を当てるほかなかった。

「貴子は少し黙ってなさい……」

「でもでも、お姉様っ！」

少女は集めた人目も気にせず、すっかり皐に引っ付いていた。これでは本題を切り出せない。ひとまず大学を出ようかとも考えた皐の元に現れたのは、少女が大声が呼びし救世主だった。

「貴子さん」

すらりと伸びた長身の男は、皐が昨日見た男だった。

これは占めたと彼女は貴子に先んじて反応する。

「あら、貴子ってば彼氏できたの？」

ここで改めて「仲良しだった」を持ち出せば黙らせられる。

皐は本来の計算高さでシナリオを書き、展開しようとした。しかし今日の皐は、とことん天に見放されているらしい。

「お姉様……。ひどい、ひどいです、ひどすぎますっ！ 私には皐お姉様しかいませんのにつ」

いつの間にかひと抱きついた貴子が、くつと頤おらがいを上げて、目には涙を浮かべている。

これには克典も驚いているようだ。皐の裸を持ってしても関心を引かれなかった彼すら反応する、異様な空気。

現れた男ももちろんと思いきや、彼は穏やかな笑みを浮かべて皐と克典に話し出した。

「済みません、自己紹介が遅れました。矢沢夏生やざわ なつお、教育学部の二年生です。貴子とは残念ながら……。デートに誘ったら断られまして……」

彼の言葉に、皐の胸先から冷たい視線を飛ばす貴子が続けた。

「当然でしょ。夏生に興味なんかありませんわ」

単刀直入にして散々な評価を下され、彼の笑みにも落胆の色が見えた。

しかし穏やかな口調に、皐と克典は好印象を受けた。二人は姿勢を正すと、自己紹介を返す。

「神岸皐、今年入学の一年生です。歳は矢沢さんと同じかも知れませんが……」

「俺のことは夏生でいいですよ。それに俺は一浪なんで……」

「ふふっ、お仲間ですね」

「おお、この大学は浪人生が少ないんで、ちょっと嬉しいですよ」
これまでが嘘のように普通の会話を繰り返していると、やっぱ嘘ではなかったと制止が入った。

「しっしっ、お姉様とのお話は終了！ ほら、あなた、とつとと始めなさいよ」

相変わらず皐にべつたりの貴子が、顎で克典に指示を出した。

「あ、はい。山川克典、僕も一年生です。よろしくお願いします」

「よろしく。失礼ですが、神岸さんと山川くんはご姉弟？」
これまた穏やかな自己紹介と応答だったが、内容はちよつと変わっていた。

「え？」

「え？ 姉弟に見えます？」

当然二人は聞き返してしまい。

もう一人は猛抗議だ。

「何をおっしゃってますの？ 私のお姉様が、こんな駄犬のお姉様なんてあり得ませんっ。夏生、頭おかしいんじゃないの？」

「あ、ごめんなさい。その、二人が似てたので……」

「似てる？ どこが？ 眼科行つてきなさ——むぐむぐ」

皐は胸先にある興奮少女の口を塞ぐと、代わりに続けた。

「どの辺が似てるかな？」

「ああ、気を悪くしたならごめん」

「そうじゃなくて、単に気になったから」

「顔、顔の雰囲気って言うか」

「それは考えたことがなかったわ……。ありがとう」

言われて改めて、二人は顔を見合う。

似ているような、似ていないような。あまり性別を主張しない顔という点で、お互い似ているようには感じた。

まじまじと見合っている二人の反応を見て、夏生はなんだか恐縮している。

「そ、そんなそっくりってわけじゃ——」

「むぐあ——と、当然よっ！ 何バカなこと——」

克典の顔を見るのに気を取られ緩んだ手を、貴子はすかさず払いのけるも。

「貴子は少し黙ってなさい」

「は、はい……」

お姉様の指示には逆らえず、僅かにしゅんとした。もちろん、すぐさま戻ってしまうのだが。

昼休みも終わりと言うときに始まった賑やかなパーティで、午後一番、三限の授業はすっ飛んでしまった。

「お姉様っ、一緒にお風呂に入りましょ」

「私はあとでいいから……」

「えーっ、私はお姉様と一緒にいいですわ」

「わかったわかった、後から行くから、先に入ってなさい」

「あんっ、じゃあ身体を綺麗にして待ってますねっ♡」

時刻は午後十一時。昼休みから始まったパーティは、克典の部屋に場所を移し続いている。

受ける授業は全く別のはずなのに、午後いっぱい臯にべったりだった貴子。ついには克典の部屋までついてきた。しかしその後、あつさりと帰って行ったのだ。臯も克典も、そのときは驚いたが、今は然もありなんと呆れ顔。

「このスートケース、一週間以上滞在するつもりなんじゃ……」

部屋の位置を確かめた彼女は一度帰って、今し方戻ってきた。携えていたのがこのスートケース。どう見てもお泊まりセットだ。

「貴子らしいわ。あの子の洋服はかさばるから、これで二、三泊だと思ふ。あのドレスだけじゃなくて、下着だって凝ったのばかり」

「そ、そうなんだ……」

女の子の下着の話に、克典は若干居心地が悪そうだ。

昨日との違いを、臯は見逃さなかった。臯と貴子の差なのだろうか、それとも昨日と今日の差なのか。いずれにしろ、糸口が見えたことに喜んだ。

一方、会話に気まずさを覚えた克典は、話題を変えるべく質問をぶつける。

「臯さんは、貴子さんと暮らしてたの？」

「ええ。ちょうど去年の今頃、一ヶ月もなかったけど。ルームシェアしてた」

「それで閨をともにしたって」

「そういうこと。実際一緒に寝てたから、妹ができたみたいで可愛くて。でもまあ、今やちよつと行き過ぎね……」

しげしげとスートケースを眺めながらの二人だったが、克典は驚いて臯を見た。

「え？ 一緒にいた頃は違ったの？」

答える臯も、半分苦笑いのままながら視線を移した。

「そりやもう、初めはおとなしい子だったもん。格好は元々だけどね」

「へえ、いつからあんな、って言うかその……」

「ああ、気にしないで。私が出て行く直前からあんなになったの。原因は私だしね」

「え？ 臯さんが——」

——ガシヤ

克典が問い返そうとした刹那、後ろから聞こえた音に二人は振り返った。

「お姉様あ、まだですかあ？」

声の持ち主は言うまでもなく。

浴室のドアから覗く濡れた肩を見て、二人それぞれの反応。

「はあ、今行くわ……」

溜息をついて降参する皐と。

「あ、あの、ごめんなさい……」

顔を朱色に染めて目を伏せる克典と。

貴子はいずれの反応も気にくわなかったらしく、今に胸もみせんばかりの勢いで声を飛ばしている。

「お姉様ってば、もう待てませんっ！ それと、そのあなた！ 何見てんのよ。レデイが入浴中なの、部屋から出て行ったら？」

そもそも彼の部屋であるとか、彼の同意も得ずに部屋どころか風呂にまで入っているとか、少女にとってはどうでもよいのだ。

「お姉様あ、早くう。そんなの追い出して一緒に入りましょうよ
お」

ここまでキツバリ唯我独尊だと反意を示す気も失せ、二人は揃って口を噤んだ。

尤も、克典に限っては別の理由で何も言えなかったのだが。

「は・や・く・☆ は・や・く・♡」

興奮でぴよんぴよん動く彼女の胸は、もはや二人から丸見えだった。

これには皐も目を伏せ、呆れざるを得ない。彼女は仕方なく浴室へと歩み出す前に、視線を流して誘ってみる。

「カッも一緒に入る？ 貴子の裸も見放題よ？」

「えっ、そ、そそそ。お二人でどうぞっ！」

ぷるぷる震える彼の背中に、彼女は加えて、聞こえぬよう告げた。

「さっきの『原因』、カッにもわかるよ。数日中にね」

混じりつけなしの笑顔になった皐は、服のボタンに手をかけながら、浴室の中へと迎えられた。

残された克典は、貴子の指示に従うまでもなく、夜風に当たることを選んだ。

§

翌朝、彼らが目を覚ますまでは平和そのものだった。

昨晚最も荒れることが予想された「どこで寝るのか」問題も、皐と克典の事前調整により回避された。皐と貴子は克典のベッドで、克典は皐の持ち込んだ寝袋で眠りにつくことにした。もちろん寝袋の出自は伏せてある。

貴子にとっては久しぶりのお姉様と一緒に。夜中どころか朝方まではしゃいでいたようだ。

何にせよ克典には関係ない。そう信じていた。

（んー、ん？ あれ？ 身体が動かないんだけど）

目を覚ましてトイレにでも行こうかと思った彼に、異変は訪れた。

（あ、寝袋だったな……）

昨晚を思い出しながらファスナーを引こうとしたとき、彼の視界に予期せぬものが現れた。

「え？」

つい声を上げてしまうのも無理はなからう。彼が収まっているべき寝袋が、彼の目に映っているのだから。もしやこれは夢なのかとも思い直したが、次の瞬間、圧覚と視覚がそれを否定した。何者かにぐわっと身体を引き寄せられ、何者かと確認すれば。

「な、な、なあっ！」

言葉にならない叫びの前に、貴子の寝顔があった。

「ちょ、ちょっと」

すやすやという言葉がびったりの少女を目の前に、叫び声は小さくなる。明晰になった彼の意識が、寝ている彼女を起こすまいと、無意識に声を抑えているのだろう。

しかし驚きが落ち着いたわけではない。

己の状況を完全に理解できぬまま、突如上方に現れた臯に助けを求めた。

「臯さんっ、これ！」

鬼気迫る表情で訴える克典を見て、臯は嬉々として答えた。

「あー、やっぱりね。貴子、寝ている間に抱く癖があつてさ、起きるまで離さないのよ」

「だいたいなんで僕がここに？ あつちで寝てたのに……」

「そりゃまあ、寝てる間に誰かが入れ替えたから？」

ひそひそ声で二人が話す間も、貴子は克典を抱き直しては気持ちよさそうに寝ていた。

「起きたら、どうなっちゃうんだろう……」

「気にしない気にしない。貴子はふかふかだから、抱かれ心地もいいでしょ？」

「そ、んなこと、は……」

臯に言われてようやく、彼は抱かれているという事実の全容を理解したらしい。

昨晚同様に顔はすっかり茹で上がり、口もあっさりと噤んでしまった。

「時間になったらきっちり起きると思う。私といたときですら、

寝坊なんてなかったから。凄いよねえ」

彼女はわざとらしくも深々と感心しながら「がんばれー」と背中越しに手を振って、ベッドサイドを離れる。

皮肉なエールを送られた彼は、またもや抱き直され、小さな頭を胸元にすっぽり収めることとなった。

（本当にふかふか……って臯さんが変なことを言うからっ！）

彼は物心ついて以来、女性に抱かれたことも、女性を抱いたこともなかった。つまり今朝が初体験、それも突然の。慌てない方がおかしい。ちょっとエッチなことを考えない方が変態というものである。

（うわあ、本当に甘い香りがするんだ……）

鼻腔をくすぐるのは、疑いようもなく貴子から発せられるものだろう。

つい先ほどまで抱いていた恐怖心など霧散して、今や感覚も思考も目の前の貴子一色だった。否、思考などすでになく、柔らかな甘い少女との感覚だけが彼を支配している。

（ああ、何これっ、凄いよ……）

未知の誘惑が、唯一自由だった彼の右腕を少女の背に導いた。

（あああ、もっと——）

俯瞰すれば抱き合う二人。その隙間を消そうと、思わず力を入れて左腕も伸ばさんとしたとき。

「ふあーあ、おはようございますー、おねえさまあ」

目を覚ました少女の寝起きは極めてよく、かつて寝ぼけたことはない。もちろん、今朝も。

「へえ、いい度胸しますすわね」

——ダンッ

貴子は両腕を突き出して、抱いていた克典を突き放す。

バネが跳ねるように上体を起こすと、流れるように右腕を振りかぶった。

——バシッ

「へんたいたいっ!」

力あらん限りに彼の頬を平手で打ち。スッと立ち上がると。

——ゲシッ

潰すように彼の腿を踏みつけて、ベッドを降りた。

派手な攻撃を受けた克典は、無言のまま、涙を流した。

(痛い……、なんで僕がこんな目に……)

先ほどまでの甘い、甘い綿菓子のような女の子は、彼の目の前から消え去っていた。

テーブルには何とか三人分の食器が並び、始まった朝食は陰悪ムードだ。

「こんな獣の住む部屋にいたら襲われてしまいますわっ」

「だからそれは……」

見た目中学生の少女が目覚めたら、隣に男が寝ていました。しかも密着して。

男の変態ぶりが際立つ話ではあるが、男は被害者であった。多少の下心を差し引いても、明らかに。

「確かに私ほどの美少女がいたら、触れてみたくなるのもわかります。でも、触れるのは犯罪!」

貴子はキッパリ言い終えると、二つしかない茶碗の一つを取る。実に美しい所作で食事を始めた。

一方の克典は深く溜息をつきながら、代替であるどんぶりに手

を伸ばした。そのとき。

「そろそろ言っちゃおうかなー」

沈黙を守っていた黒幕、皐が口を開いた。

「実はね、カツを貴子の隣に寝かせたのは私なのでーす」

しかし今更、事態はそうそう好転しない。

「……お姉様、何でもこんな下衆を庇うのですか? 獣の言い訳など人が聞くに及ばず、出鱈目だっただけです」

会話するのは口の中にあるものを嚥下して、お茶碗と箸をきちんと机に置いてから。小さなところで育ちのよさが出る貴子だが、言っていることは全く美しくない。

「本当よ? 貴子の抱き枕にされると朝ご飯作れないなーと思つて」

「いいえ、そんなことはありません。だってお姉様、この重たいのを持ち上げられまして?」

「んー、そうだねえ」

のらりくらりと反応しながら、皐は食器を机に置く。

「カツ、そこに寝転んで」

「えっ?」

「仰向けで寝転んで。ベッドまで運んでみせるから」

「う、うん」

不安げな克典とは対照的に、皐は楽しげな笑みを変えない。

この場で一番緊張しているのは貴子で、まさかあるまいと思いつつも、固唾を呑んで見守っている。

狭い部屋、狭いテーブルでの出来事だ。皐はあつという間に克典の横に屈んで。

「力抜いて楽にして」

声をかけると同時に、身体の下に手を差し込むと、スツと立ち上がった。

「え……」

その様を見て貴子が小さな驚きを声にしたが、皐は反応することなくゆったりと、お姫様抱っこで彼を運んだ。

ベッドの上に横たえられた彼が起き上がったとき、貴子は小さな溜息をついた。

「——ごめんなさい」

三人がテーブルに戻ったあと、貴子は一番に謝った。

実証されては納得せざるを得ないと言うよりは、単純に過ちに気付いたといった風だ。

「あ、うん……。僕は、全然気にしてません……」

謝られた克典も、理不尽に殴られたり踏まれたりしたことまでは問わず。その上。

「それに、ちょっとは、その、変なことも考えましたし……」

素直なおそろいだった。

「はいはい、じゃあこの話はここまで。早くご飯食べて、学校行かないと」

元凶たる皐は、都合よく罪を水に流している。加えて晴れ晴れとした笑顔は、昨日からの疑問が氷解したからかも知れない。

「ごちそうさまっと。なんだか二人、仲良くなれそうね」

「とりあえず、今は否定しませんわ」

「そうだと、いいかな……」

二人は早速、皐が思った通りを歩み出したようだった。

喧嘩して、仲直りして。

朝からそんなことをしていれば、当然時間もなくなるう。

「さ、着替えないと」

皐はエプロンを外すと鞆の中から服を取り出す。

貴子もバカッとスーツケースを開けると、ハンガーに掛けられたドレスのような洋服を出している。

克典は二人の間を縫って、玄関を出た。

「外出てるから、着替え終わったら言って」

「ちょっとなら覗いてもいいんだからねー」

「お、お姉様っ！ 覗きなんて絶対ダメですっ」

飛んできた声に対して、今朝の彼の反応は少し違っていた。

「覗かないよっ」

一言反論すると、バタリとドアを閉じる。

間もなくやってくる梅雨を知らせるかのような、湿った風が彼にまわりついた。暖かな風は、今朝の体温を思い出させる。

（貴子さん、柔らかかったなあ）

健全にも不埒なことを考えたが、じっくり味わうほどの待ち時間ではなかった。あつという間にドアが開いて、皐の音がする。

「先に使わせてもらっちゃってごめんね。どうぞ」

しかし部屋の中からは、キツイ調子を取り戻した声が飛んでくる。

「ダメーっ。まだ着替え中ですよー」

「あー気にしないで。着替え中と言っても、とっくに肌は見えないから」

貴子の声も、克典の逡巡も気にせず、皐はぐいっと腕を引き彼を中に引き入れる。

「うー、お姉様の意地悪う」

部屋の中では昨日同様、人形と見紛う少女があちこちボタンやリボンを留めている。

「ほら、ね？　こんな人前だって恥ずかしいわ」

「で、でも、貴子さんも気にしてるから……」

服を着た状態とは言え、着替え中の女の子を直視するのはためらわれる。そう思っただけ目を逸らす克典に、皐はにやりとした。

「ふーん、ずいぶん貴子を意識してるじゃない。惚れちゃった？」

「え、ええっ……」

「お、お姉様っ」

「まー好きでも嫌いでもいいんだけどねー」

期せずして貴子の反応まで得られて、皐は悪い笑みが止まらなくなっちゃった。

「うー、何か悪巧みしてますっ!」

「そんなことないよー。じゃ、私は先に出てるね」

逃げるため半分で皐が出て行くと、騒ぎになった部屋も落ち着いてた。

その拍子で、ふと克典は見つけた。

「あ、貴子さん。後ろのボタンが取れかかってますよ」

「えっ？　気付きました……。はあ、脱ぐしかありませんわね……」

ボタンは飾りで、取れかかっていても着衣に問題はなさそう。

しかしこれだけの服だ、装飾が落ちるのはきつと嫌だろうなと彼は思ったのだろう。その結果を考えることもなく、提案が口を吐いて出た。

「あの、よければ、僕が付け直しますよ」

「ホント？　ありがとう、お願いできますか？」

彼女もまた、深くは考えず反応したに違いない。

「糸、真っ白しかありませんけど……」

「ええ、構いませんわ。白っぽい服ですし」

彼はベッド下に備え付けられた引き出しから、ごくごく小さなソーイングセットを取り出してきた。

「男性の方がお裁縫道具をお持ちなんて、珍しいですわね」

「裁縫ってほどじゃありません。シャツやズボンのボタンを付け直すだけですから」

真っ白な糸を引き出すと、ともに入っていた針に通して、ちゃんと啞えた。

「んーと、あとでちゃんとやり直すついで、今はこの上から縫っちゃいますね」

「うん、お願い」

本人は謙遜してたが、男性の中では抜群に手慣れた方なのだろう。迷うことなく服を押さえて針を通した。

「あっ」

「え？　ああ、ご、ごめんなさいっ」

ボタンの位置柄、服越しとは言え克典は貴子に触れぬわけにいかない。

二人が気付いたのは、すでに作業を始めてからだだった。

「ぜ、全然気にしませんわ」

「はい、その、少し我慢してくださいね……」

お互い頬を染めながら、無言で時を過ごす。

「……」

「……」

そういえばこの部屋、二人きりなんだと思うと、ちょっと手が

震えたりもしたが。

「……………」

「……………」

時間にして数分かからずと言ったところだ。普段より時間はかかったが、失敗はない。

「できました」

「ありがとう」

仕上りをやりとりする声が震えていることに、お互い、気付く余裕はなかった。

それもそうだろう。もっと大きな変化にすら気付かなかったのだから。

「あのー、お二人さーん、早くしないと遅刻するよー」

二人はハツとして顔を上げると、皐がいつの間に戻ってきていた。

壁に寄りかかり横目で様子をうかがう皐に、二人は耳まで、真つ赤にした。

「貴子は違う教室でしょ?」

「本当にこんなんですつ。ほら、教科書だってちゃんと持ってるんですよ? 信じてくださいよお」

今朝は手も繋がず、腕も組まず。ぎこちない登校だった三人だが、学校に着いてからはすっかりいつも通りだ。

「確かに憲法概論の教科書。んー」

克典と皐が限の教室に入ろうとしたところ、貴子もついてきてしまつて問答中。

「この授業は一年生も二年生以上も受けられるんです。だから私

は今年……」

「そうねえ」

昨日の再会以降、貴子は皐にべったり。故に皐も今朝の行動を疑っている。

大学の授業だ、一コマや二コマ、サボることは珍しくもない。代わりに違う授業に潜り込んでいてもよからう。皐もそのことは気にしていない。問題は貴子が、自分についてきていることだった。

顎に人差し指を当て、じーっと考える皐に、「信じてくれますよね?」と貴子はキラキラの瞳。

しかし事態を収束させたのは、意外にも彼だった。

「二人とも、早く行かないと遅刻するよ」

克典は二人を置き去りにしたまま、教室へと入る。その姿を見て、二人それぞれに表情を明るくして、後を追った。

「それもそうね」

「わーいお姉様の隣ですのつ」

三人が席に着くと間もなく、授業は始まった。

概論と名がついている科目はおしなべて、大教室で聞くだけの講義である。憲法概論も聞くだけ科目の一つで、退屈でもあるのだろう。半数の学生は睡眠時間に充てていた。

(……………)

克典の隣、貴子も多分に漏れず就寝中だ。

突つ伏した彼女を受け止めているノートには、流麗と言うにふさわしい、上品な字が並んでいる。

(貴子さんって、本物のお嬢様なのか……?)

すっかり寝ている彼女を見ながら、克典は考えた。想像上のお

嬢様を地でいく彼女に見えたが、所作の美しさは本物のようにも思える。

彼から見て貴子の一つ向こうでは、臯が淡々と説明を聞き、手ぶらで黒板を眺めている。

（あれで寝ないってのも凄いよなあ）

克典自身について考えてみると、ノートを取ることで目を覚ましていた節もある。ただひたすらに話を聞いていたら眠くなりそうなのだが、彼女は眠そうな素振りすら見せなかった。

しかし彼に凄いと評される臯が、眠くならないにはわけがあった。

（このあとどうしようかなあ。嫌いなものを無理強いするより、好きなものにしちゃえばいいんだけど……）

授業などそっちのけで、何やら考え込んでいるのだ。

（それだけじゃお互いに、弱いよねえ。何かこう、もっと力のある……）

ろくなことを考えている風でもなかったが、臯にとっては重要なことのようにだ。あれこれ考えるうちに、今朝の授業も残り五分

「では出席カード回すので、名前書いて前に出してください」

この授業ではおなじみ、出席チェックの時間。

克典は回ってきたカードを二枚受け取りながら、隣の少女の肩を揺すった。

「貴子さん、もう終わりますよ」

「ん？ うん……。あ、寝ちゃった……」

少し気まずそうに目を覚ました彼女に、彼はカードを渡す。

「はい、どうぞ」

「ありがとう……」

渡されたカードにはノートと同様の、彼女の字が記された。

教室から出た彼らの会話は、克典にとって意外なものだった。

「カッは今日、あとは二限、四限だっけ？」

「五限も入ってるよ」

「うーん、おっけ。一人でもサボらないで出なきやダメだよ？」

「え？ 臯さんは？」

もちろん履修科目が異なっていれば、一緒に授業に出ることはない。しかし臯の言い様はそんな風ではなかった。

「もう、お姉様ったら。私は一人でも大丈夫ですのにつ」

はにかみながら突っ込む貴子の妄想の方が余程当たっているようだったが、それももちろん違う。

「ええ、貴子ちゃんとなささい。と言いながら、私はサボって出かけてくるんだけど」

「どちらへ？」

「どこに？」

二人して臯の予定について問い返すと、明確な答えが返ってきた。

「都内まで買い物にね。五限には戻るから」

臯はあっさり歩き出し、数歩行ったところで戻ってくる。

「どうなさいました？」

「どうしたの？」

彼女はまたもや二人に問われることに笑み半分、苦笑い半分。

「ごめん、貴子の携帯番号教えて」

「あ、はい。そうですね……」

あれだけ仲のよい二人が携帯番号を今交換していることに、克典は違和感を覚えたが。貴子はごくごく自然に、赤外線通信を実

行中。

次いであくまで自然に、彼女は言った。

「ほら、あなたも出さないさい。交換できないでしょう?」

あなたと示された克典は、一瞬あなたが自分のことだと理解できなかつたらしい。それも詮無きこと、彼は彼女から嫌われていると思っていた。

「何その『僕?』って顔。あなたしかいないでしょう? ほら出して」

改めて言われると、ポケットから携帯を出して、慣れぬ指つきで番号交換。

すでに用事を終えた追えた皐は、携帯を付き合わせる二人を見届けることなく、踵を返した。

「行ってくるねー。仲良くやりなさいよー」

去り際の彼女が残した言葉が効いたのか、はたまた別の理由か克典に知る術はなかったが、九十分後、彼の携帯は着信を知らせた。

「三限ないなら暇でしょ? 一緒にお昼でもどうかしら?」

彼の携帯が再び鳴ったのは、今日最後の授業、五限を終えたときだった。

間違つて終話ボタンを押しそうにながらも電話を受けると、聞き慣れた声が飛んできた。

「食堂の一階入り口に集合ね、今すぐ!」

皐は本当にその一言だけ言々と、スパッと電話を切った。

いったい何だろうと食堂に向かうと、指定の場所で手を振っている少女が一人。彼は小走りで駆け寄った。

「あなたも呼ばれたの?」

「はい。貴子さんは何か言われました?」

「なーんにも」

お互いにたった一言だけで呼び出されたらしい。いったい何だろうと二人は首を傾げながら、待つこと数十秒。呼び出した本人が登場した。買い物に行ってきた足なのだろう、左手には大きな紙袋を提げている。

「ごめんごめん、待たせちゃった?」

「いえ――」

「――今来たところ」

「あ、ああ、よかった。じゃあこっち来て」

息ぴったりに返してきた二人に内心驚いたものの、急いでいるのでコメント省略。皐はツカツカと早いテンポで歩む。

「今日はもう、授業ないよ……?」

彼女の後ろを歩いていた克典が、向かう先を察して問う。

「授業がないからなのだよ」

皐は不自然な口調で答えながら、果たして察した通り、もはや用がないはずの教室棟。彼らの授業だけではなく、授業そのものがないのだろう。建物に入るも人は見当たらない。

「どこに行くんですか?」

「こっちこっち――」

歩調を緩めることなく、言葉少なに階段を上ると、小教室が並んだフロアに出る。まだまだ早足で奥へと進み、一番奥の教室へと入った。

「ここ――」

皐は二人を招き入れると、扉を閉じて鍵をかけた。

不思議そうに見つめる二人を意に介することもなく、もう一つある扉の鍵もカチャリと捻る。

「さてと」

彼女は一息ついたようで、いつものテンポで、二人のいる方へと歩み寄ってきた。

「始めましょうか」

「何を？」

彼女は二人揃った疑問に答えることもなく、手近な椅子に座ると、トンと置いた手提げ袋からなんやかんや取り出した。

「カッはそこ座って」

言われるがまま、皐の前に座った彼に。

「ほいっと」

ファサツと被せられたのは黒髪フルウィッグ。

「へ？」

「何？」

「ウィッグ被せた」

ケロリと返された答えの意味が、二人にはよくわからない。

「え？」

「ウィッグですか？」

「そうウィッグ、可愛いでしょ？」

なぜか誇らしげに答える皐だが、二人には状況がよくわからない。

「ああ、カッラ」

「そうそう、カッラよ」

「ホントだ、私に似てるかも」

もはや二対一で会話が囁み合っていない。

二人もそのことに気付いたようで、横で突っ立ったままだった貴子が改めて問い直した。

「なぜ、ウィッグを……？」

「女の子のために決まってるでしょ」

皐は然もありませんと言ひ放ち、二人も当然そうだよねと言わん勢囲気に。

「よし、一度ウィッグ外して……。お手洗いで顔洗ってきて」

「あ、うん、わかった……」

言われるがままに椅子から立ち上がる克典。

「貴子、ドア開けてあげて」

言われるがままにドアを開けて彼を通す貴子。

もし今、この映像を見ている神様でもいれば、きっと首を傾げて呟くだろう。「何をしてるんだ？」と。しかしその場では疑問の余地もなく、事は運んでいた。……ここまでは。

皐はジャケツトを脱いで机に置くと、改めて手提げ袋からあれこれ取り出す。その姿に、貴子は気付いてしまった。

「あの、お姉様？」

「何？」

「そもそもどうして、女の子にするんですか……？」

「あー、気付いちゃった？」

てへっと作り物の可愛さで返す皐だったが、貴子の目は少し冷たい。こうなってしまうのは皐も少しやり方を変えねばなるまい。「理由は女の子にしたあと、必ず話すから。それまで協力してくれない？」

にこつと笑うとウィンクを決める。

皐にお願いされたら、貴子に断ることなどできようか。

「わかりました。ちゃんと教えてくださいね」

少し不満げながらも同意して、すぐに戻ってきた女の子の素を迎えた。

勢いで顔を洗うまでしてしまった彼も、やはり気付いたらしい。

「あの、そもそも——」

「その話はあとで、ちゃんとするから。まず服を脱いで」

反論させるつもりのない臯は、淀むことなく彼の言葉を遮り、次の指示を出した。が、その指示のハードルはかなり高い。

「え、脱ぐって、ここで……?」

「うん。大丈夫、鍵かかってるから」

「それはそうだけ……」

「あ、全部脱げてわけじゃなくて、パンツはそのままでもいいから」

臯の進め方はいわゆる教科書通り。さも条件が低いように誘導している。しかし目一杯下げた条件ですら遙か空の彼方といった具合では、あまりうまくはいかない。

彼女とて現況を予測しなかったわけではない。朝から考え抜いたのは伊達じゃないのだ。

「と言われても恥ずかしいよね?」

にこっと笑って得意のウイंकを決めると、彼女は秘策を披露した。

「……うあっ?」

彼は目を剥いた。

「お姉様??」

彼の後ろ、ドアにもたれて静観していた彼女も、ついつい踏み出してきた。

「一緒に脱げば恥ずかしくないよね?」

言うが早いか行方が早いか、サーモンピンクのニットからするりと首を抜き、袖から腕を抜いた。真っ白な肌と、パールイエローのブラジャーが二人の目に映る。

「な、ななななんてことをっ!」

「貴子が驚くことはないでしょう? 裸だっって見てるのに」

「そ、そそう言われれば、そうなんですけど……」

「でしょ? カツもこれでいいかな?」

平静と言うほかない臯に対して、驚きを隠せない貴子。加えて克典は。

「え、あ、えーと……」

今になって視線を外すわけにもいかず、あまりの驚きに何らかの表現もできず、結果として臯を凝視していた。

さすがに見慣れている貴子は思考回路が復帰したらしい。ハッと気付いて彼に両腕を伸ばし、目隠しする。

「ダメっ、あなたが見てはいけませんわ!」

「あ、うん、そ、そうだよね……」

彼は言われるがままに目隠しを受け入れているが、暗黒の視野に臯が浮かび上がるのは避けようもなかった。

「貴子、手をどけて」

「でも……」

「何? 自分の裸しか見せたくないの?」

「はい? 何をおっしゃるんですか! そんなことありません」

臯に誤解されてはたまらないと、貴子はキツパリ腕を下ろした。「よくできました。はい、カツも服脱いで」

「わかりました……」

彼は席を立ち、指示通りに服を脱ぎ出す。

脱ぐしかない。この状況下で、彼の身体はそう判断した。

臯はまんまと罠にはめたわけだが、平静な表情を崩していない。淡々と次の準備をしている。

「これ、着けてあげて」

「わかりました。……へえ、こんなのあるんですね。」

彼女はタグを切ったブラジャーを、次いで中身となるパッドを貴子に渡した。

淡いピンクのブラジャーは今の臯同様、どうと言うことのないシンプルなデザイン。女性にとっては見慣れたもので、貴子も気に留めることはなかった。

感心したのはパッドの方である。

「まるで胸を切り出したような感じ……?」

「本当にべったんこな男性用、女装用だからね」

臯は説明しながら黒のシフォンブラウス、ギャザースカートのタグを落とす。

程なくして上下とも脱ぎ終わった克典に、貴子は下着を着けて、パッドを入れる。

「このヒップパッドしたあとにオーバーニーとスカートねー」

「はい。じっとしてて、パッドは私が着けてあげるから」

ちよっとしたパニックから数分、部屋の雰囲気は一変していた。純粋な作業、着替えという仕事を三人でこなしている。

もちろん、多少の柔らかさも含みながら。

「ヒップも、女性が使えうものよりだいぶ厚いんですね」

「男の子は平らだからねえ。はいこれ、軌擦れ防止の絆創膏。次

に………」

スカートのサイドファスナーやブラウスの左前ボタンには手間取りながらも、着装完了。

目の前に立った克典を臯がチェックしている。

「おっけー、後ろ見せて。うん、おっけー。問題ないよね?」

「はい、上出来ですわ」

逆からチェックしていた貴子が言うよう、ここまででだいぶ女の子っぽい。

あとは髪と顔。

「座って。ウィッグネットして、メイクして、ウィッグのセットね」

臯が工程の指示を出すと、克典も貴子も淡々と動いた。

そして十数分後、見事に完成。

「うんうん、いいね。ジャケットは私のを着て」

「はい」

机にあったオフホワイトのジャケットを手渡すと、真っ先に反論しそうだった貴子が受け取り、克典に着せる。

仕上がりはまるで、もう一人の臯。

「夏生くんが言ってた通りねえ。姉妹どころか双子みたい」

「本当ですね……。びっくりですわ……」

「そ、そうなの……?」

感心しきりの二人に対して、当人である克典は困惑気味。着替え中は言われるがまま、着替え後も小さな鏡で顔を確認した程度では、具合もわからぬのだろう。

彼の心境は察するにたやすく、臯は道具を片付けると立ち上がった。

「まずは鏡を見ようか。お手洗いにいきましょう。靴はこれ履いてね」

「あ、うん。さすがにちよつとドキドキするよ……」

教室を出る彼は、まだ、ちよつとドキドキだと思っていた。

このフロアのお手洗いはフロアの階段近くにある。着替えに使った教室は一番奥、まずはお手洗いまで、距離にして数十メートルを歩く。

「靴は大丈夫？」

「うん、ぴったり。ちよつと慣れないけど」

「ヒールが低いから大丈夫ですわ。でも歩き方がいけませんわね。一本の線の上を歩くように……」

数十メートルを歩くだけのはずが、貴子に歩き方と姿勢を矯正され、結局三往復もしてしまった。

おかげで行動そのものに氣を取られ、彼がドキドキを忘れていたところで。

「さ、鏡で確認しますわよ」

貴子は克典の手を引きながら、教えた以上に美しい歩みでお手洗いへと入……れない。

「何ですの？ さ、行きますわよ」

なぜか足を止めた克典を引っ張り込もうとするも、彼は頑として動かなかった。

「い、いや、そっち女子トイレ……」

「はあ？ 女子が女子トイレに入るのは当然でしょう？」

「男んだけど……」

彼は忘れていたドキドキを取り戻すどころか、ドロドロである額には脂汗が浮いている。

「ほら、いいから、来なさいっ」

「ダメだって」

少女がいくら引つ張ろうとも、彼が動こうとしなければ微動だにしない。平均的な男女差どころでなく、力の差があるらしい。そんな彼を動かすのに、力を使わないのは卑である。

「行きたいなら男子トイレでもいいけど、その格好で入ったら変態だよ？」

「え……？」

「見た目で男女を判断するなら、明らかに女だから。さ、入った入った」

「うう……」

彼は右手を引かれ、両肩を押されながら、やむを得ず未知の空間へと踏み入れた。

「硬くなる必要はありませんわ。男子トイレと変わらないでしょう？」

問われた彼だったが、答えを返すことはできなかった。

「えっ……？」

鏡に映ったのは口が半開きの女の子と、彼女を挟んで微笑む二人の女の子。

「ね？ 男子トイレじゃまずいでしょ？」

「納得いきませんが、お姉様にそっくりですもの」

格好を変えると気持ちも変わるのだろうか。彼は女性のように小さくポーズを取りながら、側面背面とあちこち鏡で確認している。

言葉を忘れて鏡に見入る彼を眺めながら、貴子はぼそつと言う。「これなら女の子で通用しますわね。……ん？ そもそもなぜ、

女装を？」

その言葉に悪い笑いを深めた畢を、少女は見逃さなかった。

「お姉様っ！」

「はいはい、実はね——」

待ち合わせ時刻まで、あと二十分程度はあろうか。

改札口で待っているには少々長い。二人はすぐそばの喫茶店で時間を潰していた。

「貴子さんは、その、疲れているんじゃない？」

「私はいつも通りですわ」

「でも、一限の……」

「はあ、よく見てらっしゃるのね。ええ、寝不足気味よ」

「ごめんなさい……」

「どうしてあなたが、えっと、カノが謝りますの？ 悪いのはお姉様ですわ」

貴子は窓際のカウンター席で、アンニュイな表情を通行人に見せている。

隣のカノの具合は、覗き見ずともわかるほどに硬い。

「そんなに緊張していると持ちませんわよ？ これ、使って」

少女は取り出した薄い箱を、彼女の前に差し出した。

「あぶらとり紙。前髪上げて、軽く額に当てて」

言われるがままに行動する彼に「そうそう」と頷きながら、少女は明るさを取り戻した。

「隣で見ているだけでもおもしろいから、よしとしますわ」

「……僕、大丈夫でしょうか？」

「僕じゃなくて私、ね。やり直し」

「うう、私……つて、しゃべらないんだからいいじゃないですか」

「その油断が行動に出るのよ」

貴子にはやにやと笑いながら、再び窓の外へと視線を戻した。

「ああ、きつとあの子ですわ」

視線の先では女の子が一人、改札を出てきた。

「行きましょうか」

二人とも迷わず彼女に目星を付けたのは、彼女の身長だ。貴子よりもさらに低いとは聞いていたが、確かに低い。貴子と比べるまでもなく、際だって小さかった。

「そうですわね。あの子を一人にするのは忍びないもの」

貴子が空っぽのカップを隣に渡して、席を立とうとしたとき。

カップを受け取ったカノが問うた。

「あの、合コンなんて、大丈夫なんでしょうか……」

「大丈夫ですわ。……多分」

「え、多分なんですか……」

「はいはい、ぐずぐずしてないで行きますわよー」

隣の声にもお構いなしで、貴子はツカツカと店を出て行った。十センチはあるかというヒールを履きながら、実に綺麗に歩いて。

カノが改札口に来たときにはもう、貴子は自己紹介を始めていた

「初めまして。風間貴子です、貴子で構いませんわ。この子は山川カノ。カノは話せないけど聞くことはできるから、普通に話しかけてあげて」

——ぺこり

貴子による紹介にあわせて、カノはお辞儀をする。続いてトー

トバッグからスケッチブックを取り出し、サラサラと記した。
 〈山川カノです。よろしくお願いします〉

皐が明かした女装の理由は単純だった。

「女の子として合コンに出るためよ」

彼女はボカンとする二人を置いてけぼりで、説明を続ける。

「男三対女四の合コンなんだけどね、大丈夫大丈夫、二時間ばかり飲み食いしてしゃべってれば終わるから。えっと、待ち合わせは一人女の子を拾ってから向かって——」

「つてえ、ちょっと待っててください！ 女の子として、合コンに出すんですか？」

早速反対したのは貴子。本人の方は、未だあんぐりと開いた口が閉じない。

「うん。大丈夫大丈夫。女の子の大先輩、貴子も一緒だから」

「はいい？」

ただでさえ同意からはほど遠かった彼女だが、自分も巻き込まれるとあつてはさらに遠のく。猛反発する思われたが。意外にもあつさりと収まった。

「貴子がそういうの好きじゃないのはわかってるけど。ね？ ここは察してよ？」

「……そういうことなら、仕方、ありません」

眼前で両手を合わせウインクする皐に、渋々ながらも受け入れたようだ。

大学を出る前に聞いた話では、皐は女性四人の特徴を、男性側に伝えてあるそうだ。

（三人まで揃ったところでは、確かにその通りですわねえ）

人通りの多い改札口前で、貴子は呆れながらも感心した。

声の出せない長身の美人、山川カノ。偽名を使う彼女はまさに、声を出せない。

（とは言え、直球で攻めるとはねえ。ま、まあ、案外受けるのかも知れませんが）

高飛車なお嬢様、風間貴子。高飛車もお嬢様も、全くもって誤りであると彼女は主張したが、結局は仕方あるまいと諦めた。

そして。

「岬早子と申します、よろしくお願いいたします」

中学生のように幼げな少女。

「よろしく」

挨拶を交わしながら貴子が右腕を差し出すと、握手したら折れるのではないかという腕が握り返してきた。

（さしもの私も、これでは出る幕がございませんわ）

皐は早子をとにかく華奢で可愛いと表現した。聞かされた貴子は、それなら私だつてと不満に思っていたが、実物を前にすると納得である。小さなわだかまりもなくなり、彼女は二人が意外なほど、軽快に歩み出した。

「それでは行きましょうか」

「は——」

声を出しそうになるカノに、キッと注意の視線を送りながら。

一行は早子に乗ってきたのとは別の路線で一駅、他の面々との待ち合わせ場所へと向かう。帰宅ラッシュとは無縁の上り電車、車内はガラガラだったが彼女たちは立ち話。

「早子さん、って呼んでいいですか」

「あ、はい」

「今日はどうしてこんなところに……」

早速核心を突いたと言ってもいい貴子の発言に、カノも興味津々である。もちろん、早子も同様だろう。

「その、いつの間に参加する話になってまして……」

言葉と同時に飛んできた上目遣いに、二人とも軽く溜息をつくはかなかった。

「私たちも。約束取り付けてきた本人は来ないのでしょう？」

「そうなんです」

こくんこくと頷く彼女とあわせるかのように、カノも強く頷いている。

三人とも同様に理不尽な状況に巻き込まれたらしい。共感を胸に、停まった電車から降りた。

駅前広場に着いたのは待ち合わせの五分前だったが、すでに他の四人は待っていた。「他の四人」とすぐにわかった理由はたった一つ。合流した三人が真っ先に注目した、残り一人の女の子だ。「うあー、ホントに外人さんですよ……」

早子がついに口にした通りだ。ハッキリした目鼻立ち、緩くウェーブのかかった金髪。日本人から見ても典型的な外国人がそこにいた。

こうなると早子は見えた目通りに、そしてカノも中身は彼である話しかけるなどんでもない。残る貴子が、早子のときと同じく自ら声をかけると、あっさりと自己紹介を始めた。

「こんにちは。中江^{なかえ}さん、ですか？」

「はい、初めまして。中江^{なかえ}京^{きょう}です」

「初めまして、風間貴子です。よろしく」

その様子を見ながらも、まだうろたえているのが早子とカノだ。

「は、はろー？」

おどおどと口を開いた彼女に、男性陣からも笑い抜きの言葉が飛んだ。

「あ、あのさ、京、日本語しゃべれるから……」

「え、え、あー、あつ！」

彼女が慌てふためく中、京は見逃さなかった。

カノも《Hello》とスケッチブックに記していたことを。

程なくして女の子同士の見え方が終わると、幹事であるらしい男の子を先頭に、一同居酒屋へと移動した。

席に着くとザーツとビールが並び、乾杯とともに始まるは自己紹介だ。これでだいぶ時間かかるだろうなあと、誰もが思ったろう。案の定、女の子四人の自己紹介は牛歩状態。質問の山。

「京は英語と日本語、どっちが得意なの？」

「日本語、と言うか、英語しゃべれないよ」

「その金髪って地毛？」

「染めてるよー。地毛が金髪の人なんてあんまりいないって」

一人目、京。父親がアメリカ人で白人のハーフだそうだが、生粋の日本育ち。一人目としては適当なところだったろう。たまたまとは言え、他の三人は難敵だ。

席順で次は早子。彼女の場合は全員が察していただろう。

「岬早子です……。文学部の一年生です……。……。あの……、よろしく願います……」

「早子ちゃん、ちっちゃくて可愛いなあー。サークルとか入ってるの？」

「え……と、特に……、何も……」

果たして推察の通りである。よって早子の話で躰きながらも、男性陣は総力を挙げてサポートと言ったところだ。その裏にはおそらく、次の貴子まで繋げばと言う読みがあったのだろう。

しかし、暗雲が立ちこめていることを知っていたのはカノだけだった。

「おー、貴子はカッコいい感じだねー。一人旅とか似合いそう」

「そうですね、旅行はよく行きますよ」

「俺も旅行よく行くんですよ、最近はどこ行っただんですか？」

「新潟の平林」

ここで知っていて当然という口調なのが、貴子らしいところだ。知らない男性陣は多少詰まらざるを得ない。しかしまだ大したことはない。

「えっと、ごめん、新潟のどのあたり？」

「だいぶ上の方ですわ」

えーっと、上の方ってどこですか？ カノですら聞きたいところだ。回答自体はそう悪くないのだが、とにかく言い方に陰がある。

皆が皆、これどうするんだよと言う空気の中、まだまだ拾うものはある。

「あーあー、この辺ね、ここ、ここ」

手元の携帯電話を操作しながら、地図を示した男の子が一人。貴子の物言いさえ柔らかなければ普通にこうなるのだろうか、「知らないの？」 トーンでは勇氣ある行動である。

しかし勇氣があるのではなく、空気が読めなかったのだろう。切り上げればよいものを、彼はさらに質問だ。

「何しに行ったのー？ 温泉、かな？」

地図で近くに温泉マークでも見つけたのだろう。おそらく貴子にも察しはついていたはずだ。故に。

「いいえ、写真を撮りに」

カノはひやひやしながらも、話には興味があった。今になって気付いたが、貴子のことはあまり知らない。もちろん、旅行や写真撮影が趣味であることも。

「写真俺も撮るよー。今凝っててさー。カメラ何使ってるの？」

だからカノにとっても、彼らの質問は眉をひそめるものであった。

今日の女性陣、顔の序列は明らか。京は同列で比べにくいだが、他三人の中で貴子は群を抜いている。故に食いついておきたいのだろう。

しかし、彼女はそもそも、この場に仕方なく来ている部類なのだ。

「GSW690のⅢ型」

回答の内容はカノにもわからなかった。

しかし回答の意味するところは、よくわかった。「とっとと終わらせたい」だろう。

貴子は終始そんな調子だった。カノと早子は黙りがち。京も参加には特別な理由があったのかも知れない、貴子のようではなかったが、乗り気という風でもなかった。

二時間後、彼女たちにとっては晴れてお開きである。終わる間際に入ったお手洗いで、貴子は心底疲れた声を出している。

「はあ、やっと終わった……。もう二度と合コンなんて行きませ

んわ」

「貴子さん、凄く嫌そうでしたもんね……」

「カノだって疲れたでしょう？ 終盤はぼんやりしてたじゃない」

「そうですね……」

「あー断ればよかった。そもそも男性は嫌いなんですもの」

「え？」

この二時間に対する、カノの気持ちは貴子と少し違っていた。今この瞬間、貴子の言葉を受けてもおお。

しかし、つい聞き返してしまったカノを、貴子が気にすることはない。

「ほら、もう少しがんばりなさい。黙る準備はできまして？ 行きますわよ」

彼女たちが店を出ると、二手に分かれて解散となった。

単に帰る方向が違うからなのか、他の意味があるのか、カノや貴子は知りたいとすら思わなかった。二人にとっては、他の意味などない。いち早く離れ、帰るのみ。

二人を先頭に、早子、そして二人の男性陣が駅へと向かう。最中、男の子が一人、貴子に声をかけている。

「あのさ——」

同時に肩にかけられた手を、貴子は無言で払った。はずだった。

「離しなさいよ」

スッと立ち止まった彼女は、くるりと反転。

掴まれた手を引き抜くと。

振りかぶることなく、小さく的確な動きだった。

——ピシャンッ

彼女の右手が、彼の左頬を捉える。

緊迫状況にあった場の空気はついに一線を越えてしまった。

「てめえちよつと可愛いからって——」

叩かれた男性も黙ってはいなかった。

幸いもう一人は冷静だったようで止めにかかるも、力不足で止まりきらない。

「貴子さんっ」

カノは彼女の名を叫ぶと、ワンステップで間合いを詰めて——

——ガンッ

これには貴子も哑然とした。

カノはためらいなく、グーでパンチをお見舞いしている。しかも、かなり痛そう。

哑然としたのは貴子だけではなかった。早子も、制止していた男の子も。そして、カノ自身も。

無駄なく打ち抜き、そして戻したカノは、大慌てで貴子と早子を引っ掴んだ。

「帰りますよっ」

カノは一気に吹け上がる。

引っ張られる二人が全速力で走って、なお後れを取る速度。いよいよ早子が転びそうになると、彼女は速度を落とした。

「早く乗って」

二人が顔を上げると、タクシーがドアを開けて待っていた。

「お姉様あーっ、ただいまーっ」

早子待ち合わせの駅まで送り届けた後、二人も無事、カノの部屋に戻った。

「おかえりー。どだったー？」

出迎えた皐は、明らかにやけている。

どこまで察しているのだろうか。訝るカノに対して、貴子はあつさりとしていた。

「お見通しなのでしょう？」

さらに彼女は、もう一言。

「……帰るのですか？」

「ご名答。先輩は違うわね」

皐は部屋の隅に置いてあったポストンバッグを拾うと、二人の立つドアの方へとやってきた。

「カノ。私はお別れするね」

「えっ？」

「ごめんね突然で。でも、あなたにもわかる 때가来るわ」

彼女は惜しむことなく、三和土に並べられたパンプスに足を入れ、カノにウィングを飛ばした。

続いて後ろを向くと、靴を脱ぎ、部屋の方を向いたままの貴子に言う。

「これは儀式だから。許してね」

「どうぞ、ご自由に」

皐が何のことだろうと、背を向けたままの貴子を見ようとしたとき。

「んあっ」

視界は皐の顔で占められ、唇には温かな感覚が生じる。二度目のキス。

「バイバイ」

カノが白黒しているうちに、皐は扉を開けた。

皐がいなくなってからしばらくも、二人はそのまま、部屋に入ることも忘れて突っ立っていた。

「貴子さんは、帰らないの？」

皐がいなくなっただから、皐といるために来た貴子は帰るのだろう。カノの考えは単純だった。

対する貴子は、カノにとつて難しかった。

「病み上がりをして一人にするほど冷たくありませんわ。もう少し一緒にいてあげます」

何を言っているのかわからず、カノがぼやっとしていると。

「女の子は嫌いじゃありませんしね」

貴子はカノに歩み寄り、ウィングを少し直した。

あとがき

久しぶりに結構書いたなーとお疲れの Fukapon です。あとがき書かなくてもいい？ とか思っちゃうぐらい疲れています。

今年こそはと思っていたんですけどねえ、世の中うまくいきません。結局この本、連休中で作ったようなものです。暗い話はこの辺にしまして。

本作のネタは、もう十年前に思いついていたものです。どうもおもしろい話になりそうもなく見送っていたのですが、ここに来て「なんかいいけそうじゃね？」と書いてみたらやっぱりダメでしたごめんなさい……。臆って何者なんだよーってのが肝なんです。そこはまあみんな考えて！ もう少しわかりやすくした方がいいと思うんですけどね、いや、ほら、もう今日がコミティアですし、ね。

見所ってわけじゃないんですが、がんばったなーってのは「女の子の甘い香り」的なことを書いたこと。少なくともここ数年、私はこの手のことを書いてないと思うんです。ついつい「ねえよ！」って突っ込んでちゃって。お前はファンタジーを理解しろよと、今回は言い聞かせました。綿菓子のような女の子、いるといいなあ。使い古された表現ですが、読むと毎回喜んじゃうんですよ。はい、先日にもやにやしました。みんなそうなのかな。

あ、合コンはわからんで誰か取材させて！ そーゆー目的でなら乗り気でいけそうな気がするよ！

さーて、まだまだがんばるぞー。このあとがき、きつと会場に持ち込みます。

二〇一一年五月五日、寝られることを祈りながら。

五月に来たる彼女

Fukapon

2011年5月5日 初版発行

発行所	まにふいくみやほか
印刷／製本	project KAIGO

Copyright © 2011 Fukapon <fukapon@projectkaigo.org>
<http://www.projectkaigo.org/>

